東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

談話における左方転位のイタリア文

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1987-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/692

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

談話における左方転位のイタリア文

鈴　木　信　吾

は　じ　め　に.

イタリア語には，文中のある要素を本来の位置よりも文頭寄り，つまり左のほうに置く文法上の手だてがある。このような構文は，ふつうの語順を大幅にゆがめ，無標から有標にかえる点で，談話上何らかの意図があって用いられると考えられる。本稿では，この談話上の意図がどのようなものであるかに焦点をあてながら，文の左側にある要素がもつ性質についていくばくかの解明を試みたい。なお，ここでいう「談話」とは，いくつかの（ときにはひとつの）文が何らかのひとまとまりをなしている言語表現のことである。

さて，イタリア語では，ある要素を文の左側にもってくるのに，次の三つのタイプの構文が区別される(注1)。「左方転位（dislocazione a sinistra)」，「話題化（topicalizzazione)」，「懸垂話題（*hanging topic*, o “tema sospeso”)」の三つである。まず前者ふたつの区別からみておくと（例文における問題の左の要素は斜字体であらわすことにする），

(1) *Antonio*, l'ho incontrato ieri.「アントニオに私はきのう会った。」

(2) *Antonio*, ho incontrato ieri (non Pietro).「アントニオだよ，私がきのう会ったのは。（ピエトロではない。）」

(1)が左方転位，(2)が話題化の例である。どちらも直接目的補語が文の左側に移動した例であるが，左方転位のほうがあとに残った文のなかに接語代名詞（pronome clitico）という写しを残すのに対し，話題化にはこれが残らない。一方，話題化はきわだった音調をもち，左に出た要素は対照強勢を受ける。したがって話題化は，談話の面からみると，むしろ「対照化」とでも名づけるにふさわしい操作だといえる。

次に，左方転位と懸垂話題の区別に移ると，

(3) *Di Giorgio*, me ne hanno parlato proprio male.「ジョルジョのことで，実に悪く言われるのを聞いた。」

(4) *Giorgio*, me ne hanno parlato proprio male.「ジョルジョのことでは，実に悪く言われるのを聞いた。」

(3)が左方転位，(4)が懸垂話題の例である。この対から明らかなように，ふたつの構文の表層でのちがいは，左方の要素が（前置詞を媒介に）文の残りの部分とのつながりを示しているかどうかにある。左方転位ではこのつながりが明示され，左に動いた要素は統辞的に接語代名詞と関係づけられる（例(3)では di Giorgio＝ne)。ただし，この種の代名詞による写しは，直接目的補語の場合は別にして，必ずしも残らなくてもよい。次の左方転位文ではかっこ内が随意の要素である。

(5) *Carlo*, l'hanno fermato i carabinieri(注2).「カルロは警察が引き留めた。」
(6) *A Luigi*, non (gli) ho mai scritto.「ルイジには全然手紙を書いていない。」
(7) *Dei miei figli*, (ne) vado fiero.「息子たちのことを私は自慢に思う。」
(8) *Su questo lavoro*, non riesco a concentrarmi(ci).「この仕事に私は集中できない。」

他方，懸垂話題は，「文の文法」によらず「談話の文法」により生成され，文の残部との統辞上のつながりがない。このため代名詞も単なる写しではないから，必ずしも接語である必要はないし（例(9)の lei)，また名詞句による肩がわりでもかまわない（例(10)の quell'imbecille)。

(9) *Laura*, penso sempre a lei.「ラウラのことはいつも思い浮かべている。」
(10) *Paolo*, Pietro ha litigato con quell'imbecille.「パオロといえば，ピエトロはあのばかとけんかをした。」

一般に，左方転位も，懸垂話題も，その談話中での機能は，無標の語順ではテーマにできない要素をテーマにするという点にあるとされる（この立場をとる文献については Berruto, 1985, pp. 61-62 参照)。ここでは，問題をおもに左方転位に絞って，これが実際にテーマづけの機能を負うのか，あるいは何らかのほかの機能を負うのか，を検討しながら，左方転位の構文がつくられる談話上の意図を探っていきたい。そこで，これからの考察を次の順ですすめていくことにする。1. 左方転位により移動した要素は常に旧情報であるといえるか，2. テーマであるといえるか，3. 話し手の共感の焦点であるといえるか。

1.

イタリア語の左方転位要素がテーマかどうかをみるまえに，Cinque（1977 および 1979）がその旧情報性を指摘していることに注意しておこう。少し長くなるが，以下に彼の考えがよくまとめられている箇所を引用しておく。

「左方転位の適用による文の派生が文脈という点からみて適格となるのは，その文脈が次の条件にかなっているときだけのようである。その条件とは，左方転位した要素が先行の談話中ですでに提示されているか，あるいは要素の『指示物』が発話の場面から明らかであるか，あるいはそこに存在する何かから推測できるかのいずれかである。厳密にいうと，文脈に関する制限はもっと微妙である。それは今述べたほど客観的なものではなく，むしろ話し手の判断に依存している。もしも話し手が，上記いずれかの条件にもとづいて，『あるもの』が聞き手の心のなかにすでに存在すると判断したならば，そのときにはそれを左方に転位することができる。しかし注意しなければならないのは，条件のうちどれかひとつがあてはまる場合でも，話し手はなおも『あるもの』が聞き手の心に存在しないと判断することができ，それゆえ左方転位をしなくてもよいということである。したがって，上述の客観的な条件は，話し手にとって『あるもの』が聞き手の心に存在するはずだと判断するのに単に必要な条件でしかなく，十分条件ではない。上にあげた条件をまとめると，それはおおよそ，プラハ言語学派が提唱し，のちに Halliday (1967-68) が展開した（『新情報』に対する）『旧情報』の概念に匹敵する」(Cinque, 1979, p. 118。傍点は原文斜字体)。

左方転位した要素が旧情報をになうという Cinque の見解を裏づける例は，Vanelli (1986, pp. 251-255) にあげられている(注3)。この著者は旧・新の情報を Chafe (1976, pp. 30-33) にならってとらえなおしているが，ここでの左方転位に関する考察にかぎっていえば，上に引用した Cinque の「条件」がそのまま Chafe の旧情報の定義にあてはまると解釈してさしつかえない。

Vanelli は，はじめに，直接目的補語の左方転位を例としてあげている。

(11) *Carlo*, l'hanno fermato i carabinieri.「カルロは警察が引き留めた。」

文頭の要素 Carlo と旧・新の情報とのかかわりをみるには，(11)の文が言語内でどのような文脈中にあらわれうるかを調べる方法がある。まず，突然話を切り出す場合や「何が起こったか」のような問いに答える場合，いいかえれば文全体に新情報をになわせたい場合には，(11)の文は使うことができないという。

(12) Che cosa è successo?「何が起こったのか。」
——**Carlo*, l'hanno fermato i carabinieri.

こうした例によれば，(11)の左方転位した目的語は確かに新情報としての解釈が受けられない。これに対して，文頭に出た Carlo が先行の文脈中ですでに示されている場合，つまり旧情報となる場合には，(11)の文の使用が許される。たとえば，皆が集まったのにカルロだけまだ来ていない場面で次のようなやりとりが可能である。

(13) Ma come mai Carlo non c'è?「なぜカルロはいないのか。」
——*Carlo*, l'hanno fermato i carabinieri. Arriverà dopo.「カルロは警察が引き留めた。あとで来るだろう。」

そこで Vanelli は，左方転位を受けた目的語は文のテーマであるばかりでなく，旧情報でもなければならないとむすんでいる（以上が pp. 251-253)。

しかし，われわれは，次のようなやりとりもまた成り立つことを見逃してはならない。

(14) Ma come mai Carlo non c'è?
——*La sua macchina*, l'hanno fermata i carabinieri. Arriverà dopo.「車を警察が引き留めた。あとで来るだろう。」

左方転位した la sua macchina は，(14)の問いのなかには見当たらないし，その質問者の意識のなかにはじめから存在している（と解答者が判断している）とはとうてい考えられない。つまり新情報である(注4)。

Vanelli (1986, p. 255) 自身，左方転位する要素が直接目的でなく間接目的補語の場合には，旧情報でなければならないという条件はあてはまらないとして(注5)，文全体が新情報になる例をあげている。ここでは類似の用例をみておこう。

(15) Che cosa è successo?
——*A Carlo* hanno fatto male a una gamba.「カルロは片足に痛手を負わされた。」
(16) Ah lo sai? *A Carlo* hanno rubato il portafoglio ieri.「知っているかい。カルロはきのう財布を盗まれた。」

(15)は「何が起こったか」に答えられる例，(16)は突然の発話に堪えられる例で，いずれも左方転位した間接目的補語が新情報をになえることを示している。

ところで，「不定」をあらわす要素は一般に新情報でなければならないが（Chafe, 1976, 特に p. 42 参照)，このような不定名詞句が左方転位を受けた例さえ報告されている。Berruto (1985, p. 73, 注 18) は口頭による資料から「UN（不定冠詞）＋名詞」の転位した例を拾っている。

(17) *Un parere*, lo potrà dare mercoledì.「意見は水曜日に言えるだろう。」

またWandruszka (1986, p. 21) は新聞から同様の例をあげている（ただし，「注 8」も見よ)。

(18) *Un posto a sé*, nel panorama dell'estate, lo ha Pesaro con il suo 'Rossini Opera Festival'.「ひとつ独自の地位をこの夏占めるのは，『ロッシーニ・オペラ・フェスティバル』を催すペーザロ市である。」

「UN＋名詞」以外の不定名詞句についても，新情報でありながら左方転位している例は簡単にみつかる。

(19) *Qualcosa*, almeno potresti farlo.「何か少なくともできることがあるだろうに。」

(20) *Qualcuno*, penso che verrà.「誰か来るだろうと思う。」

以上，左方転位が旧・新の情報に対してもつ関係をみてきたが，これまでの考察をまとめてみると，転位要素は旧情報ばかりでなく新情報でもありうるということになる。したがって，これが談話上いつも旧情報でなければならないとする条件は，決して有効なものではないといえる。

2.

まえにみたように，一般には，談話における左方転位の機能は，そのままではテーマにならない要素を文頭（の近く）に出すことによってテーマづけする点にあるといわれている。事実，これまで本文でみてきた例でも，左方の転位要素がテーマであるといえそうな文が確かに存在する。(11)と(16)からもう一度例をとろう。

(21) *Carlo*, l'hanno fermato i carabinieri.「カルロは警察が引き留めた。」

(22) *A Carlo* hanno rubato il portafoglio ieri.「カルロはきのう財布を盗まれた。」

もし，一般によく定式化されるように，文のうちで何について述べているのかをいう部分をテーマ（そしてテーマについて何を述べているのかをいう部分をレーマ）と呼ぶことにすれば(注6)，上のふたつの例は，それぞれ斜字体で示した左方の要素を出発点として，これについて何かを述べようとする文だということができる。実際，無標のテーマであるはずの主語は，(21)では文末にあって情報量が高いため，また(22)では不特定であるため，これをもとに文が展開するとはおおよそいい難い。

今，テーマ（あるいはレーマ）であるということを段階的な現象としてとらえると，主語が本来のテーマ性を回復するにしたがって，左方転位した要素のテーマとしての機能はそれだけ微妙なものになってくる。Sornicola (1985, pp. 13-14) から例を借りれば，

(23) a. *Il violoncello* lo suona Maria.「チェロはマリアが弾く。」

b. *Il violoncello* Maria lo suona.

c. Maria *il violoncello* lo suona.

主語の Maria が情報の伝達量を軽くする位置に出れば出るほど，いいかえれば，a→c の順で左に移れば移るほど，左方転位を受けた il violoncello のテーマ性は減少するのである。

Wandruszka (1986, p. 21) は，左方転位で文頭に出た要素が必ずしもテーマとはかぎらないとして，現代作家たちの用例を引いている。

(24) *Le terre* zia Teresina le lascerà a me.「その土地をテレジーナおばさんは私にくれるだろう。」

(25) Ma *questo* Sances non glielo aveva detto…「でもこのことをサンチェスは彼に言ってなかった。」

(26) *Del cane*, difatti, Ida non si dava nessuna pena…「犬のことを実際イーダは何も構ってやらなかった。」

(27) E *ai poveri* darebbe la casa con tutto quello che c'è dentro.「また（彼は）貧乏人に家ごとそっくり財産をやってしまうほどだろうに。」

Wandruszka はテーマを伝達の中心（つまり対話者のあいだの関心の中心）をなす要素と規定しているが，それによると，(24)～(27)の例はどれも無標の語順の場合と同様にあいかわらず主語（それぞれ zia Teresina, Sances, Ida, そして省略された代名詞）がテーマであるという。しかし伝達の中心が必ずしも主語だけに集中しているわけではないので，左方転位した要素とのあいだに生じる競合関係が問題になる。

「主語と転位要素とのあいだの関係は次のようであると考えてもよい。つまり，この種の発話における伝達の中心はふたつの極からなり，そのひとつは何かを述べるのに基礎となる要素A，もうひとつはAを基礎として何かを述べるのにかかわりとなる要素Bである。そこで，われわれは要素Bを『テーマとのかかわり（rapporto tematico)』と呼ぼう」(Wandruszka, 1986, p. 21)。

これによれば(24)～(27)の斜字体で示した左方の要素はテーマに対して「テーマとのかかわり」ということになる。なお，Duranti & Ochs (1979a および b) は，左方転位した要素と主語とのあいだにさまざまな性質上の類似点があるのを統計で示しているが，この指摘は，左方転位文における伝達の中心が両極性をもつとする Wandruszka の見解を暗に裏づけていると考えられる。

テーマを「伝達の中心をなす要素」と定義しようが「何について述べているのかをいう部分」と定義しようが，Wandruszka のとる立場の有効性にはかわりがないようにみえる。要するに，左方転位で動いた要素は少なくとも「何について述べているのか」を示すかかわりとなるから，「伝達の中心」の一翼をになうにはちがいない。しかし，必ずしもこれが文のテーマであるとはかぎらないのである。

このことは，これまでみてきた左方転位を懸垂話題と比べてみると，さらにはっきりする。

Cinque (1977, pp. 407-408, 注13) は，このふたつの構造が相互作用を起こすところでは「懸垂話題＋左方転位要素」の語順しか許されないとして，次の例をあげている。

(28) *Giorgio, di libri*, sapevo che lui voleva comprarne due.「ジョルジョは本を二冊買いたがっていると（私には）わかっていた。」

(29) **Di libri, Giorgio*, sapevo che lui voleva comprarne due.

(28), (29)ともに，名詞句の Giorgio が懸垂話題，前置詞句の di libri が左方転位した要素である。このことは，Giorgio が接語でない主語の代名詞 lui によって照応されていること，そして前置詞句が左方転位によってのみ生じる要素であることからそれぞれわかる(注7)。上の二通りの語順のうち(28)のほうだけが適格だという制約は，Cinque のいうように，おそらくテーマをいちばん最初にもってくるという文のもつ自然な性質によるものであろう。つまり，文頭に置かれる懸垂話題のほうが左方転位でそれに続く要素よりもテーマ性が高いとみられる。結局，左方転位のテーマづけの機能はそれだけ弱いものなのである。

もうひとつ左方転位と懸垂話題の構文の比較を試みよう。一般に「不定」をあらわす要素や熟語中の部分的要素はテーマになりにくいことが予想されるが（Rodman, 1974, p. 452 および安井 1982², pp. 64-66 参照），これらの要素を左方転位させたのが下の(30)の系列，懸垂話題にしたのが(31)の系列である。

(30) a. *Qualcuno*, penso che verrà.「誰か来るだろうと思う。」

b. *Di qualcosa*, almeno avresti dovuto parlare davanti agli esaminatori.「何か少なくとも試験官の前で話すべきだったのに。」

c. *A quel paese*, ci manderei questa canaglia.「厄介払いしてしまいたいよ，このならず者を。」

d. ? *Di cappello*, ne facciamo tanto al nostro professore.「敬意をわれわれは先生に対して払っている。」

(31) a. **Qualcuno*, penso che lui verrà.

b. **Qualcosa*, almeno avresti dovuto parlarne davanti agli esaminatori.

c. **Quel paese*, ci manderei questa canaglia.

d. **Cappello*, ne facciamo tanto al nostro professore.

(30), (31)ともに，a, b では不定代名詞（それぞれ qualcuno, qualcosa）が，また c, d では熟語（それぞれ mandare a quel paese「厄介払いする」, fare tanto di cappello「敬意を払う」）の一部が文頭に置かれている。(31)の系列，つまり懸垂話題の文がすべて容認不可能なのは，これらが，そのようなテーマになりにくい要素を文頭にもってきて，無理にテーマにしようとしているからだと考えられる(注8)。だとすれば，懸垂話題の構文は，従来いわれてきたとおり，

テーマづけの機能をきわめて強く負っていると推論してよいように思われる。一方，(30)の左方転位文が適格性を失わない（か，あるいは少なくとも(31)よりはましである）のは(注9)，上の場合とは逆に，この構文が必ずしもテーマづけの機能をになうものではないからである。このことからも，左方転位した要素が単純にいつもテーマだとするのは誤りであることがわかる。

3.

これまでわれわれは，左方転位で移動した要素が必ずしも旧情報であったり，テーマであったりするとはかぎらないということをみてきた。実は，Berruto (1985) も，イタリア語の話しことばの資料体を検討することにより，われわれと同じ結論を得ている（ただし，彼のいう「左方転位」には懸垂話題も含まれる)。彼は議論をさらに一歩すすめて，左方の転位要素はいつも話し手の関心の中心にあたるとしている。ここでいう「話者の関心の中心」とは，まえにみた Wandruszka の「対話者の関心の中心（＝伝達の中心)」とはちがって，話し手の視点，つまり共感の焦点（*focus* empatico）と呼ぶべきものである。そこで，最後に，左方転位が本当に話し手の共感の焦点を示す手だてといえるのかどうかをみることにする。

はじめに，無標の語順の文をあげておこう。

(32) a. Io ho picchiato Giovanni.「私はジョヴァンニをなぐった。」
b. Io ho sposato la mia moglie attuale nel 1980.「私は今の妻と1980年に結婚した。」

これに対応する左方転位文にはいるまえに，久野 (Kuno) (1978 および 1987) を参考にしながら，共感にまつわる談話上の原則に少しふれておきたい。まず，上の二文に共通するのは，話し手が自分以外の者には共感の焦点を合わせられないということである——久野のいう「発話当事者の視点ハイアラーキー(speech act empathy hierarchy)」——。これに即せば，(32)の a, b では，発話当事者（「私」）の共感度がそれぞれ Giovanni, la mia moglie attuale よりも大きいといえる。さて，(32)に対応する受身文について考えると，

(33) a. ?? Giovanni è stato picchiato da me.「ジョヴァンニは私によってなぐられた。」
b. ?? La mia moglie attuale è stata sposata da me nel 1980.「私の今の妻は私によって1980年に娶られた。」

これらの文は，かなり特殊な文脈でも想定しないかぎり不自然である。受身文のように意図的な操作を受けた有標の構文は，談話の原則を破ると不適格な文を生じるが——久野のいう「談話法規則違反のペナルティー (markedness principle for discourse-rule violations)」——，事実，上の二文の不自然さはこれによって説明できる。つまり，受身文が話し手の共感の焦点を表層の主語に合わせようとする手段なのに——久野のいう「受身文のカメラ・アングル」あるいは「表層構造の視点ハイアラーキー (surface structure empathy hierarchy)」——，(33)の

文は，その主語に発話当事者の「私」よりも共感度の低い Giovanni や la mia moglie attuale をもってきているから，意図的に談話の原則に違反していると仮定できるのである。受動態が有標の構文をとるのに加えて，受身文としての焦点（Giovanni, la mia moglie attuale）と発話当事者に向けられる焦点（「私」）とが互いに矛盾しているから，(33)には無理が生じているのである。

以上のことをふまえたうえで，(32)から左方転位文をつくってみよう。

(34) a. *Giovanni*, io l'ho picchiato.「ジョヴァンニを私はなぐった。」
b. *La mia moglie attuale*, io l'ho sposata nel 1980.「今の妻とは私は1980年に結婚した。」

これらの文も，明らかに意図的に操作された有標の構文であるから，もし左方転位文としての焦点と発話当事者に向けられる焦点とがずれているならば，受身文の場合と同じように不自然になるはずである。それにもかかわらず(34)が適格な文であるのは，左方転位文としての焦点が依然として発話当事者の「私」から動かないからだと考えられる。つまり，(34)は Giovanni や la mia moglie attuale に共感の焦点を絞るための構文ではないのである。もっと一般的にいえば，左方転位は必ずしも話し手の共感の焦点を示す手だてではないということになる。したがって，左方の転位要素がいつも共感の焦点にあたるとはかぎらないといえる。

む す び.

冒頭でみたように，話題化の構文は，談話という面からみれば，左側に出た要素を別の要素に対照させてきわだたせる機能をもっている。一方，懸垂話題について散発的にみたことをここでまとめれば，この構文はきわめて強いテーマづけの機能をになっている。それぞれを別のことばでいうと，話題化は対照性に関して有標，懸垂話題はテーマ性に関して有標ということになる。

話題化や懸垂話題に比べると，左方転位のもつ談話上の機能ははっきり規定することがむずかしい。われわれは，この構文がどのような意図で用いられるかについて否定的なとらえ方しかしてこなかった。それによれば，左方転位の要素は，必ずしも旧情報やテーマであるとはかぎらないし，また共感の焦点でもない。しかし，このことを別の角度からとらえなおしてみれば，次のようにいえよう。左方の要素はやはり旧情報やテーマ，あるいは話者の共感の焦点であるのがふつうであり（Berruto, 1985による統計の結果も参照のこと），ただ，これらの条件が破られたからといって文が容認不可能になるとはかぎらない，と。そして，この点で左方の要素は文の主語と共通の性質を有していると考えられる。両者における談話上の性質の類似性は，Duranti & Ochs（1979a および b）の指摘するところでもある。したがって，左方転位の

構文がある意図のもとにつくられるとすれば，そのなかには，ある要素を文の左側に移すことによって，その要素に主語と競合できるだけの談話的機能を与えようとする意図が含まれていると考えてよいだろう。　　（本学助教授＝イタリア語担当）

注

（注１）　この区別は Cinque に負うものである。残念ながら，彼の最近の著作が手もとに届いていないので，ここで三タイプのあらましを述べるにあたっては，Cinque (1977 および 1979) のほかに特に Vanelli (1986) を参考にした。

（注２）　例文（５）のように直接目的補語が左に置かれたものは，懸垂話題の例としても通用する。このことについては「注４」を参照のこと。

（注３）　ただし，ここに引用した現代イタリア語の例は，Vanelli の論文においては，13，14世紀イタリア語の語用論上および統辞論上の構造を解明するうえで，単なる一ステップとして設けられたものにすぎない。

（注４）　もし，左方の名詞句が新情報ならいつも懸垂話題であるとする立場をとれば，本文の例（13），（14）の答えがそれぞれ談話中でもつ機能については矛盾のない説明ができるかもしれない。つまり，文頭が新情報をになう（14）の答えは懸垂話題の文だと解釈すれば，左方転位した要素は（13）のように依然として旧情報にかぎられるといえそうな気がするのである。実際のところ，左方に出た要素が直接目的補語にあたる場合は，文の残りの部分との統辞上の関係がもともと表層に明示されないから，問題の文が左方転位の例なのか懸垂話題の例なのかは，談話や音調の側面から検討する以外にない（Vanelli, 1986, p. 265 参照）。今，もう一方の音調面からふたつの構造を区別すれば，懸垂話題の場合は，左方転位に比べて名詞句と文の残りとのあいだの休止が一般に長く，また名詞句自体も上昇調の疑問のイントネーションを帯びることがあるという（Cinque, 1977, pp. 406-407）。われわれの調査では（13）の答えにこのイントネーションがあらわれ（Ochs Keenan & Schieffelin, 1976, p. 242 の英語の例も参照。Cinque はこれらを懸垂話題の例としている），一方（14）の答えには休止を短かめにした左方転位の音調があらわれうるという結果を得た。これは，さきほどの談話面からの解釈に符合するというにはほど遠く，むしろその逆に近い。このようなくいちがいが生じるのは，左方転位と懸垂話題との区別（いいかえれば左方の要素と文の残部との統辞上の関係の有無）が必ずしも談話上や音調上の事実と単純な対応関係にあるのではないからだと考えられる。事実，ふたつの構造を区別する音調上の差が（休止やイントネーションの）相対的な基準によってしか規定できないのと同様に，談話における差もはっきりとした二分法で規定できるとはいい難い。つまり，左方に出た直接目的補語が新情報ならば即座に懸垂話題であるとする解釈は必ずしも成り立たないのである（のちにみる本文の（15），（16）で，間接目的補語の a Carlo が左方転位の例でありながらいずれも新情報をになう事実も参照のこと）。

（注５）　Vanelli はこの事実を受動態との関連で説明しているが，その明晰な説明は，ここでのわれわれの論旨に直接関係がない。

（注６）　ただし，テーマとレーマをみつけるのに決定的で確実な規定は今のところ知られていない。テー

マ・レーマにまつわる問題の複雑さについては，たとえば Fries (1984) を参照のこと。

(注7) Giorgio が懸垂話題でなく左方転位した要素である場合には，di libri との語順が（統語上）随意になることに留意されたい。不適格な (29) に対して，次の lui を欠いた適格文を比較のこと。

Di libri, Giorgio, sapevo che voleva comprarne due.「本をジョルジョが二冊買いたがっていると（私には）わかっていた。」

なお，代名詞による写しをもたない Giorgio が（ne という写しをもつ di libri と同様に）左方転位した要素であるのは，主語の代名詞の省略（つまり「ゼロ」の代名詞）が補語の接語代名詞に匹敵すると考えられるからである (Calabrese, 1985 参照)。

(注8) 例 (31) の結果にもとづく予想とは裏腹に，懸垂話題に不定名詞句をもってきても文が依然として適格性を失わない場合がある。しかし，このような場合には，不定名詞句がテーマの機能を発揮できるだけの何らかの条件をそろえていると仮定できるものである。たとえば，「UN＋名詞」が懸垂話題になった次の例をみてみよう (Berruto, 1985, p. 73, 注18より)。

(i) *Un altro* ci [＝gli] arriva una bomba.「もうひとりには爆弾が当たった。」

「UN＋名詞」がテーマになりにくい理由のひとつに，これがふつう新情報にしかなりえないことがあげられるが（鈴木1986, pp. 113-114 参照），上の用例は Chafe (1976, p. 42) のいう「おそらく唯一の例外候補」の場合にあたると考えられる。それは，(i) が次のような文脈のなかにうまくはめこまれることからわかる。

(ii) Un soldato riesce a scappare e *un altro,* invece, gli arriva una bomba.「ひとりの兵士は逃げ延びたが，もうひとりは爆弾が当たった。」

(ii) の un altro は，un soldato という同一ではないが同種の人物を示す「先行詞」をもっており，Chafe はこのような要素を旧情報に区分している。つまり，un altro は「不定」を示しながらも旧情報というテーマになりやすい特性をもっていて，この特性が懸垂話題として文頭におさまるのを許していると仮定できるのである（この意味で本文の例 (18) の un posto a sé「ひとつ別個の地位」という表現も旧情報になる可能性があるので，再考の余地があるかもしれない)。

(注9) 熟語が左方転位を受けて適切さをたもつ例は，そのほか Cinque (1977, p. 402 および 1979, pp. 98-99) にも示されている。すべて目的語の名詞句が移動した例であるが，これらも参照のこと。

参考文献

Berruto, G. (1985) : "'Dislocazioni a sinistra' e 'grammatica' dell'italiano parlato" in A. Franchi De Bellis & L.M. Savoia (a cura di), *Sintassi e morfologia della lingua italiana d'uso; teorie e applicazioni descrittive* (*SLI*, 24), Roma, Bulzoni, pp. 59-82.

Calabrese, A. (1985) : "La sintassi dei pronomi atoni" in C. Schwarze (Hrsg.), *Bausteine für eine italienische Grammatik,* 2, Tübingen, Narr, pp. 117-179.

Chafe, W.L. (1976) : "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and point of view" in C.N. Li (ed.), *Subject and topic,* New York, Academic Press, pp. 25-55.

Cinque, G. (1977) : "The movement nature of left dislocation" in *Linguistic inquiry,* 8, pp. 397-412.

Cinque, G. (1979) : "Left dislocation in Italian; a syntactic and pragmatic analysis" in *Cahiers de lexicologie*, 34, pp. 96–127.

Duranti, A. & E. Ochs (1979a) : "Left-dislocation in Italian conversation" in T. Givón (ed.), *Discourse and syntax* (*Syntax and semantics*, 12), New York, Academic Press, pp. 377–416.

Duranti, A. & E. Ochs (1979b) : "'La pipa la fumi?'; uno studio sulla dislocazione a sinistra nelle conversazioni" in *Studi di grammatica italiana*, 8, pp. 269–301.

Fries, U. (1984) : "Theme and rheme revisited" in R.J. Watts & U. Weidmann (eds.), *Modes of interpretation*, Tübingen, Narr, pp. 177–192.

Halliday, M.A.K. (1967–68) : "Notes on transitivity and theme in English" in *Journal of linguistics*, 3, pp. 37–81, 199–244; 4, pp. 179–215.

久野　暲 (1978) :『談話の文法』大修館。

Kuno, S. (1987) : *Functional syntax; anaphora, discourse and empathy*, Chicago, Univ. of Chicago Press.

Ochs Keenan, E. & B. Schieffelin (1976) : "Foregrounding referents; a reconsideration of left dislocation in discourse" in *Proceedings of the 2nd annual meeting of the Berkeley Linguistic Society*, Berkeley, B.L.S., pp. 240–257.

Rodman, R. (1974) : "On left dislocation" in *Papers in linguistics*, 7, pp. 437–466.

Sornicola, R. (1985) : "Un metodo di analisi della struttura informativa e sue applicazioni all'italiano" in A. Franchi De Bellis & L. M. Savoia (a cura di), *Sintassi e morfologia della lingua italiana d'uso; teorie e applicazioni descrittive* (*SLI*, 24), Roma, Bulzoni, pp. 3–18.

鈴木信吾 (1986) :「イタリア語における無標の語順について」『イタリア学会誌』36, pp. 102–121.

Vanelli, L. (1986) : "Strutture tematiche in italiano antico" in H. Stammerjohann (ed.), *Tema-rema in italiano*, Tübingen, Narr, pp. 249–273.

Wandruszka, U. (1986) : "Tema e soggetto in italiano" in H. Stammerjohann (ed.), *Tema-rema in italiano*, Tübingen, Narr, pp. 15–24.

安井　稔 (1982²) :『新しい聞き手の文法』大修館。